4月5日

「ゲッセマネの祈り」

マタイ 26:36―46

武安　宏樹　牧師

主イエスは十字架にかかられる前にゲッセマネで祈られました。ゲッセマネの祈りは、主イエスとの祈祷会です。ペテロ・ヤコブ・ヨハネは、変貌山の出来事を経験している重要な弟子たちです（17:1―8)。「オリーブ油をしぼる所」の意味のごとく、主イエスはここで血の汗を滴らせ、苦しみ抜いて祈られました。弟子たちを同行したのは、ご自分の祈る姿を目に焼きつけさせるためでした。

孤独は主をさらなる神への叫びへと駆り立てます。福音書著者であるマタイ・マルコは「ひれ伏して」、ルカは「ひざまずいて」と表現しますが、それは苦悩のあまり一定の姿勢をとれぬほどの激しい祈りを意味しています。「杯」とは、神の憤り・さばきの杯のことです。「できますならば、過ぎ去らせてください」とは、杯を放棄するのではなく、恐れつつもさらに主の御前に進み出たことと、さらに、「あなたのみこころのままに」という徹底した従順の姿勢を見ることができます。

その一方で、主イエスが「わたしといっしょに」目をさましていてほしかったのにもかかわらず、弟子たちは居眠りの失態を犯しました。祈りは主の助けによる共同作業によってなされるべきものです（ｴﾍﾟｿ 6：18)。後にペテロはペンテコステに御霊を注がれて、大胆に主の御業を行うようになりましたが、書簡の中で「目をさませ」と言っています（Ｉペテロ 4：7/5:8-9)。

２度目の祈りに見られるのは、主イエスの心の中に恐るべき杯を飲み干す備えができたということ。祈りの中で、さまざまな恐怖・孤独と戦いながら、やがて激しい思いの嵐は凪となったのです。３度目の祈りではより静かな確信に満ちた祈りへ深められたことでしょう。３度とも居眠りに終始した弟子たちを起こしながら、主イエスは最後に力強く言われました。「立ちなさい。さあ、行くのです。」もはや逃避も抵抗も選択肢には存在しませんでした。

ゲッセマネの祈りから私たちが教えられること。それは、私たちが人間であるがゆえにからみつく、さまざまな苦しみや感情について、それを横に置きつつ、心から主の召しを受け入れるための祈りの時間の必要ではないでしょうか。天上からとりなされる父なる神と御子イエス・キリストが、そして私たちの内なる御霊が「わたしといっしょに祈る者は誰かいないのか。」と祈り手を常に探しておられます。主と共に苦しみ、主と共にこの地上に御心の実現を喜ぶ、そのような苦難のしもべを今日も探しておられるに相違ありません。

4 月 12 日

「よみがえられた方」

マタイ 28：1－10

武安　宏樹　牧師

復活の信仰、それはキリスト教にあって他の宗教には見られないものです。「永遠のいのち」を有限である人間が受け止めるにあたって、復活の瞬間を記した箇所はないものの、福音書の記者たちはそれぞれの視点から周囲の人々の反応について記しています。

土曜日の日没までが安息日ですが、空が明るくなるのを待ち切れないように、女性たちは墓の中の遺体に香料・香油を塗ろうと急ぎました。丁重に葬ることは人間の思いとして当然と言えますが、彼女たちの頭からは、以前から繰り返し言われていた「３日目の復活」が抜け落ちていました。御言葉は超自然です。しかし、私たちの理解や経験則で思いつくことは、この世の事柄です。

墓に行くと、大きな地震とともに主の使いが現われて入口の石が動きました。それは想像を絶する光景でしたが（ダニエル 10：5－9）、中が空であることと、霊的な復活を教えるための神の配慮に満ちた奇跡でした。主の使いの言葉を聞いて、彼女たちの暗く閉ざされた目は開かれました。そして喜びながら弟子たちのもとへ駆け上がりました。

私たちは自分のやっていることが立ちゆかなくなった時に、十字架の苦しみと死が自分のためであること、豊かな復活のいのちを受けていることに気づかされます。古き自分を墓から掘り返そうとするのは愚かなことですが、「主こそすべて！」と両手を挙げて宣言する時に、御霊によって 2，000 年前の復活の奇跡を日々体験することができるのです（II コリント 5：17）。

そんな女性たちに主は「おはよう」という親しみに満ちた暖かい言葉で近づいてくださり、弟子たちにガリラヤでの再会を伝えるように言いました。この地（ｲｻﾞﾔ 9：2）は後に大宣教命令を発して昇天された地です。ですから復活の喜びは、地の果てまでの宣教への召しとつながっていくのです。

4 月 19 日

「主がお立てになった牧師」

エペソ 4:11-13

岡山　敦彦　牧師

教会政治の形態として、牧師が遣わされる方法に、①理事会が遣わす監督制(主にホーリネス系)、②教会が招く招聘制(会衆制とも言い、主にバプテスト系)、③三者の話し合いによって決める合議制(同盟教団)といった方法があります。この合議制は本教団の三本柱(聖書信仰．宣教協力．合議制)の一つです。

一見、私たちが決めるように思われますが、その根本は聖書によるものであることを忘れてはいけません。『キリストご自身が～お立てになったのです』(11 節)とその権威はキリストご自身から与えられたものと教えられています。また、I テサロニケ 5:12-13 には選ばれた牧師を認め、またその務めのゆえに愛をもって深い尊敬を払いなさいと書かれています。神はモーセに、『わたしはあなたとともにいる～わたしがあなたを遣わすのだ』(出エジプト 3:12)と召命を与え、荒野での 40 年の訓練を与えました。牧師は完璧ではないですが、神が遣わされるのです。

牧師についてはヤコブ 3：1, 2 に多くの人が教師になってはいけません。その責任は大きく、さばきは厳しいと書かれています。時に牧師は失敗もしますが、同じ失敗を繰り返さぬようにすべきです。また『自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう。』(I テモテ 3:1-5)いや、できないと言っています。また、牧師夫人を大事にする教会は祝福されます。牧師夫人は縁の下の力持ち、陰の仕事をする人です。その牧師夫人がいるから、教会がまとまるのです。

牧師はみことばを語る時は権威をもって語らなければなりません。講壇から降りた時には、逆に仕える者とならなければなりません。そして何より、信徒はその牧師のために祈らなければなりません。そして牧師と信徒が一致して教会を立て上げていくことが大切です。

4 月 26 日

「幼子の信仰」

マタイ 18：1—5

武安　宏樹　牧師

前章の宮の納入金の箇所では、外の世界にどのようにしたらつまずきを与えないかというテーマでしたが、18 章からは主イエスを中心とした弟子たちの共同体の中の話に入ります。彼らの頭の中といえば、12 人の出世レースで誰がその中から頭一つ抜け出すのか、また師匠や周りから認められるのかでいっぱいでしたが、そんな醜い争いを見かねて、主が言われたこと。それは全く予想外の答えでした。「天の御国で一番偉い人」として彼らの真ん中に立ったのは、小さな子どもでした。それだけではない。天の御国に入るために、彼らは「悔い改めよ。」と言われたのです。「悔い改め」とは、　‘心を入れ替える’‘方向転換する’という意味です。他の人よりも先んじて偉くなりたい、エリートになりたい。そういった野心から足を洗って、180 度向きを変えて再出発をしなさい。そうでなければ決してあなたがたは天の御国に入ることはできないと断言されたのです。

主イエスの十字架に至る生涯は、自分を投げ出した下向きの生涯でした。ここに究極の謙遜があります。‘低い者’（ﾏﾀｲ 23:12）の模範として、主イエスは‘子ども’を選ばれたのです。子どもから学ばされるすばらしい霊的な特徴。その１つ目は、自己主張せず謙遜なこと。２つ目は、他者に依存して生きる心。３つ目は、親を信頼して生きる心です。弟子たちに大事なことは、打算とか競争といった人間的思いではなく、子どものように純粋にただ主を慕い求めることにあるというのです。私たちが子どもと関わる時に、個人的には謙遜、魂との関わりでは目線を低くすることへの訓練となるでしょう。

誰が一番偉いのか？　そのような争いをしている共同体の中には、主のご臨在されるべき場所は失われてしまっているでしょう。しかし、子どものように小さな者、弱い者の中に、神を見ようとするあわれみの共同体の中には、主の喜びが豊かにあるのではないでしょうか。周囲よりも、天に目を上げて、私たちが神の子ども(ﾖﾊﾈ 1:12)とされている喜びを共有していきましょう。そして互いに愛し合う共同体とされましょう(ﾖﾊﾈ 13:34-35)。

5月3日

「神のいつくしみときびしさ」

ローマ 11:17-24

武安　宏樹　牧師

ローマ書のいわば「イスラエル問題」の箇所です。神はイスラエルの民を祝福の基として選ばれましたが、彼らが頑なだったため、イエス・キリストをただ信じることによって救われる道を備えてくださいました。その結果、 救いの御手は異邦人へと伸ばされ、福音は世界中に拡がっていきましたが、パウロの胸中には同胞であるイスラエルの民の不信仰がいつもありました。 私たちが植物の成長に目を留めるのは果実など外から見える部分ですが、農夫である神(ﾖﾊﾈ 15:1)は、良い土地に種を蒔いて、水･日光･肥料など成長するために配慮しつつ、果樹園全体の成長のために「刈り込み」(ﾖﾊﾈ 15:2)をされます。農夫の視点は、私たちが各人の霊的状況を観察するのに重要ですが、ここでは枝･幹･根といった各論についてです。面白いのは「接ぎ木」が逆に、古いオリーブの木が新しい接ぎ穂(異邦人ｷﾘｽﾄ者)によって活性化されることです。これは異邦人が優秀だったからではなく、神の御手です。

百歩譲って、異邦人ｷﾘｽﾄ者が接がれるために、イスラエルの不信仰な民が折られたと言えるとしたら、自分が自分を支えていると思ってはならない。族長たちが土台を形成して、その霊的な遺産が神のあわれみによってついに、「生まれながらに御怒りを受けるべき子ら」(ｴﾍﾟｿ 2:4)であった異邦人にまで派生したという事実を受け止めなければならない、とパウロは言います。ですから彼らがよりどころとすべきは、信仰のみです(Ⅱｺﾘﾝﾄ 13:5)。

私たちが今このように信仰によって立たされている背後には、主イエスの天からのとりなしや、信仰の諸先輩方の愛情が注がれています。素晴らしい賜物も、キリストの似姿に変えられていく聖化の働きも、全ては神からのプレゼントですから、恐れつつ感謝しなければなりません。また深遠な救いのご計画の中で､現状では切り落とされている人々が回心することもあり得ることです。世界に目を留めてみれば、福音はアジア・アフリカ等に拡がりを見せており、日本も産みの苦しみかもしれません。しかし、リバイバルされた暁には私たちは誇るのではなく、神のいつくしみときびしさに目を留めながら､むしろ切り落とされている国々や人々にとりなす者とされましょう。悔い改めた者に等しく祝福を賜るのが神の愛。とどまりつづけましょう。

5 月 10 日

「神の賜物と召命」

ローマ 11:25-32

武安　宏樹　牧師

前回はイスラエルの民と異邦人の「接ぎ木」についてでしたが、このイスラエル問題について神の救いの歴史の展開から見たいと思います。

神の天地創造(創世記１章)は神の目に「非常に良かった」のです。堕落(同３章)により、全ての人が罪の支配下に閉じこめられました。しかし、この時に神はすでに救いの計画を表明されました(同 3:15)。イエス・キリストによる全き救いを待ち望みつつ、旧約の時代に神が取られたのは、選びの民を通して祝福を全地にもたらすことでした。族長たちは信仰ゆえに祝福を受けました。ユダヤ人の多くはかたくなであり亡国の憂き目に遭います。救いの最終手段である御子を遣わしたにもかかわらず、十字架につけるという愚行に出ます。しかし、栄光を受けられた復活の主は、弟子たちの宣教を通して、福音がユダヤから全世界へ拡げられていくことを告げます。聖霊の働きによる彼らの宣教で多くの実が残ったのは、ユダヤ人ではなく異邦人でした。

パウロはまさに異邦人のための使徒であると同時に、ユダヤ人が相変らず かたくなである現状を悲しみました。その心は単なる愛国心からではない。旧約聖書に通じていた彼だからこそ、これまで愛と忍耐をもって導いてこられた神が、アブラハムとの間に立てられた契約に忠実な方であり、異邦人以上にユダヤ人を気にかけてくださるはずだと確信していました。そして異邦人の救いの計画が満ちた暁は、ユダヤ人も今よりもっと多くの者が立ち帰る。神の選びはユダヤ人が先でしたが、福音の受容は異邦人の後塵を拝しました。しかし「ねたみを燃やして」立ち帰る時に、神はユダヤ人を救いに迎えてくださると断言しています。

30～32 節には、不従順な民の彼方に、「にもかかわらず」神のあわれみを展望することができます。パウロの頭には、人種を越えてキリストにあって 一つにされていくヴィジョンがありました。終わりの時に全てのキリスト者は引き上げられ、天地創造の時と同じように地上は更新されます。何と偉大な救いの計画でしょうか！　私たちには信仰によって雄々しく歩みながら、日々証しの務めがありますが、神のあわれみの御手は刻々と動かされています。ユダヤ人にも日本人にも、全ての民に救いの計画を進められる神に感謝！

5 月 17 日

<u>「宣教命令と日本宣教」</u>

マタイ 28：16－20

近藤　幸子　師

イエスは復活の後、ガリラヤの山に弟子たちを集め、宣教命令を与えた。宣教命令を受けた弟子たちはエルサレムで聖霊を受けて世界宣教が開始されました。今年はプロテスタント宣教 150 年の記念の年です。イエスが弟子たちに与えた宣教命令開始時の宣教師たちの使命感に満ちた宣教、宣教使命は生き続けています。

イエスの弟子たちに与えた宣教命令の３つの内容は次のことです。
①イエスにいっさいの権威が与えられている、被造物すべての支配者であると宣言された（18 節）。
②全世界に行ってあらゆる国の人々を弟子とし、バプテスマを授け、またわたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように彼らを教えなさい（19～20 節前半）。
③わたしは世の終わりまでいつもあなたがたとともにいます。とイエスの恵みを約束された（20 節後半）。

日本宣教の開始、江戸末期から明治初期一日本の歴史の激動期、キリスト教迫害時代。
①宣教使命に立つ初期宣教師は 1859 年 5 港の開港に伴い米国の教会より、長崎にリギンズ、ウィリアムズ、フルベッキ、横浜にヘボン、ウィリアムズ、フルベッキ、横浜にヘボン、ブラウン、シモンズ、１年後にゴーブル。1873 年ネイサン・ブラウン来日。
②聖書翻訳と出版に取り組む。
ゴーブル：1871 年に摩太福音書
ヘボン／ブラウン：187２年馬可伝・約翰伝、１８７３年馬太伝
③最初の教会創立は１８７２年日本基督公会（現在の横浜海岸教会）
その日９名の日本人受洗者。

明治初期キリスト教禁制下（切支丹禁制高札撤去１８７３年）の時に宣教師達は日本語に取り組み聖書を翻訳した宣教の情熱と愛を感謝し、受けた恵みを与える者として主に仕えたい。

5 月 24 日

「神こそすべて」

ローマ 11:33-36

武安　宏樹　牧師

ローマ書 11 章の最後ですが、１～11 章にかけてパウロが語ってきた救いの教理についてのまとめです。ローマ書は体系的に書かれていますが、決して冷ややかな論文の体ではなく、彼の熱い想いがこめられた手紙であります。
ここまで、異邦人. ユダヤ人それぞれの罪と神のさばきについて明らかにしつつ、律法の行いによってはだれ一人救いを得られないが、イエス・キリストの贖いをただ信じ受け入れることによって義とされることと、勝利宣言（８章）について見てきました。つづく９～11 章では救いの恵みについて異邦人の後塵を拝した同胞たちへのパウロの苦悩の足跡を知ることができます。そのトンネルを抜け、神の偉大な摂理の御手に栄光を帰すのが 33～36 節です。

「底知れぬ深さ」。それは、「神の深み」（Ⅰコリント 2:10）や「極度の」（Ⅱコリント 8:2）にも使われる語です。神の「知識」は全知であり（Ⅰ歴代 28:9）、他者から教えられる必要のないものです。神の「知恵」は創造と統治における完全な思慮のことです。ユダヤ人の頑なさについて散々嘆いた末パウロが思い至ったこと、それは、神の救いの計画の全容を知ることは到底できないということでした。神の会議に列席した者はいません。しかし、必要なことは教えてくださり、そうでないことは隠される。世に生起することの全ては神の御手の中にある。私たちは競争社会の中で生きていますが、周囲を見て一喜一憂するよりも、力を尽くしつつ神の完全な御手の中に委ねる信仰が大切です。私たちは、 純粋に神「を」求めているのか、神「に」あれこれ自分の願いを求めているのか、吟味が必要です。アブラハムの如く、「ただ聞き従うのみ」があるべき姿です。

36 節は美しい頌栄で結ばれています。「神から、神により、神へ」。神の偉大な知恵と知識に取り囲まれて私たちは生き、この神を喜ぶことこそ全てです（Ⅰコリント 8:6/伝道 3:11-12）。女預言者ミリヤムはタンバリンを手に賛美をし、（出エジプト 15:21）、パウロとシラスは獄中で賛美すると大地震が起きました（使徒 16 章）。八方塞がりの状況だからこそ、主をほめたたえるチャンスです。天の窓は絶えず開いています。私たちも「神こそすべて!」と宣言しましょう。

5月31日

「聖霊が降られたとき」

使徒2：1-13

武安　宏樹　牧師

聖霊が降られた瞬間の記事は、ある種の超常現象とも言えるものですが、いわゆる「霊体験」ならば、他宗教やオカルトでも取り上げられています。スピリチュアルなものがもてはやされている現代において、私たちは聖霊のお働きに無知であってはなりません。

①　旧約時代における聖霊の働きについて

旧約聖書に「聖霊」という語は登場しませんが、創世記1:2には天地創造の働きに聖霊が関わられていたことがわかります。イエス.キリスト(ヨハネ1:2)と共に、神のご性質は三位一体です。聖霊は人に感化を与える働きが主です。士師たち．ダビデ．ソロモンなどに油を注いでの統治の働き、そして預言者を通して神の言葉を語らしめる働きを力強く行いました。そのように旧約時代は選ばれた神の器にのみ注がれ、他の人々にはから取り囲んで働こうとされました。しかしペンテコステ預言(ヨエル2:28-29)を通して、神は信じる全てに聖霊を注いで、内側から働かれることを語られました。

②　新約時代における聖霊の働きについて

定めの時に、御子イエスは聖霊のお働きによってマリヤから生まれました。バプテスマ(ルカ3:21-22)において聖霊を受けた主イエスは、キリスト者のひな型です。たった３年間の公生涯の中で弟子たちを訓練しつつ、再三予告したのは聖霊降臨の約束でした(ヨハネ14:16)。その時を待つように弟子たちに言われて、天に帰られました。みなで一つになって待ち望んでいた五旬節に、聖霊は降られました。その光景はシナイ山(出エジプト19章)やホレブ山(Ｉ列王19章)を彷彿とさせる恐るべきものでした。炎の激しさ(雅歌8:6)をもって、隔ての壁を打ち破り、キリスト者の内からきよめ、宣教計画のために用いようとされます。使徒書ではペテロをはじめ臆病な弟子たちの変えられた姿がよくわかります。私たちの内に今も生きておられ、決して離れられないお方。賜物を注いで、神の教会の建て上げのために用いようとされています。聖い恐れを持ちつつも、親しく人格的に交わる内に愛とヴィジョンは注がれます。

6月7日

「霊的な礼拝」

ローマ 12：1-2

武安　宏樹　牧師

先週はペンテコステということで使徒２章から聖霊降臨のメッセージでしたが、これを踏まえて味わうべき箇所が、この 12 章です。

①　ありのままの自分をささげること（１節）

「そういうわけですから」は、広義では 11 章までの救いの教理全体、狭義では 11 章の終わりを受けています。パウロ書簡には、教理→実践の順に書かれたものが多いですが、どちらも信仰生活に不可欠です。神の甚大なあわれみのゆえに懇願しているのは、「ありのままの自分をささげよ」ということです。やもめのたとえ（マルコ 12:41-44）で教えられるように、神が見られるのは私たちの手の業ではなく心の中身です。見せかけのささげ物の数々については、預言者たちも非難しています（Ｉサムエル 15:22）。神は最上のいけにえとして、御子イエス．キリストを私たちの罪のためにささげられたので、こちらから穴埋めする必要はありません。「霊的な」とは合理的という意味で、私たちが救いの恵みに応答していついかなる時もささげるのが礼拝です（ヘブル 13:15）。

②　聖霊による刷新（２節）

私たちの礼拝生活はこの世に生きる限り、さまざまな妨げを受けますが、そのような様々な「世＝時代」の型にはまってはならないと言います。世の力から脱却して礼拝するのに必要なことは、「心の一新によって自分を変える」こと。深い部分が聖霊によって刷新されることです（テトス 3:5）。御霊のみが、私たちの深い部分に届き（Ｉコリント 2:10）、善悪の識別力を与えます（ピリピ 1:9）。この聖霊の働きを通して変えられることを願うか否かは、私たちの日々の決断に委ねられています。献身と聖霊の働きによる真剣な礼拝が、私たちを主の似姿に変えていきます（Ⅱコリント 3:18→聖化）。救いは一回きりの出来事ですが、聖化は継続的です。①献身→②刷新の順が原則ですが、刷新されて献身に励むことも多くあります。ありのままの自分を神の前に差し出して、聖霊のお取り扱いを受けましょう（コロサイ 3:9-10）。「霊に燃え、主に仕え」ましょう。

6月14日

「キリストにあって一つ」

ローマ 12：3-5

武安　宏樹　牧師

神が私たちを創造されたのは、神の栄光の顕現のためです。一人ひとりに豊かな計画が注がれています。しかし堕罪によって、互いが自己中心的な目的のために傷つけ合ったり、バベルの塔のように神に挑戦するという間違った目的のために人間の知恵を結集するようになりました。私たちは礼拝者として、神との個人的関係と、主にある人間関係、つまり「神．自分．他者」の三角関係を正しく理解する必要があります。

①　セルフイメージ（３節）

パウロは使徒的権威から宣告しています。聖書全体で、高慢に対する戒めと謙遜の勧めはなされていますが、これらは私たちにとって抽象的な印象を否めません。大事なのは修飾語の部分です。「信仰の量り」の「信仰」とは、本書前半での意味と異なり、個人に与えられた御霊の力や奉仕についての意味。聖霊の働きが自分単体だけでなく、共同体の中での自分に働かれる以上、肉の力による高ぶりや卑屈さは、聖霊の働きを止めてしまいます。「慎み深い考え方」とは、主にある共同体の中で、謙遜かつ健全なセルフイメージを持つことです。交わりの中で、自分の価値観や悩み苦しみが全てではないこと、周囲と自分の素晴らしさを知ることができます。

②　多くの器官、一つのからだ（４～５節）

３節を踏まえつつ、人体というわかりやすいたとえでパウロは説明します。　Ｉコリント 12 章 14～27 節にはそれが詳しく記されています。ラグビーの格言で、「One for All,All for One」というものがありますが、身内の非を責めれば全体がギクシャクし、感謝すれば全体に喜びを共有できます。スポーツと異なる点は、聖霊の賜物が注がれた私たちに、一軍も二軍もないことです。目立たぬ奉仕をする方が、実は重要だったりします。牧師も役員も皆さんの祈りと励ましなしには立っていくことができません。教会成長とは、「キリストのからだの成長」「聖霊のチーム の成長」と言い替えられます。各論より、「からだ全体」の視点に目が啓かれると、教会も自分も力強く成長します。

6 月 21 日

「マケドニア人の叫び」

使徒 16:5-15

村松　勝三師

パウロたちは聖霊によってアジヤ地方で語ることを禁じられました。長いこと教会に通いながら、”聖霊”について知らない人がいます。聖霊とはどんなお方でしょうか？　イエス様は公生涯の最後に、十字架にかけられ、死なれ、よみがえり、昇天され、父なる神様の右に座られました。今、よみがえられたイエス様を見ることは出来ませんが、その代わりに御聖霊様を神様は送ってくださいました。”聖霊”とは臨在したもう神の霊です。

ところが、初代の教会でも弟子と呼ばれていながらも聖霊を知らない人々がいました。（使徒 19：1-7）

聖霊とは、その働きとは、如何なるものでしょうか。
聖霊とは色々な方法で働いて下さる方。「包括者なる神」、すなわち私たちを常に守り、働いて下さる方。臨在したもう神の霊に心を開く時に、私たちに働いて下さいます。

冒頭に話したように、パウロら一行がアジヤに伝道することを、聖霊によって禁じられましたが、そしてその幻の中で”マケドニア人の叫び”を聞くや直ちに、そこに赴きました。そしてルデヤが導かれ、ピリピの教会が誕生しました。聖霊に従うことで模範的な教会が生み出され、私たちも祝福にあずかります。

エマオ途上で復活の主に出会った時のように（ルカ 24：32）、聖霊に従うことで心が燃やされます。聖霊の実がなるように（ガラテヤ 5：22～23）、日々の生活の中であらわされる聖霊の働きに私たちも応えていきましょう。

7月5日

「偽りのない愛」

ローマ　12：6-8

武安　宏樹　牧師

2007 年を象徴する漢字が「偽」でしたが、世の中全体に誠実さが失われていることを嘆かわしく思います。しかし、箴言 19:1 や 21:21 をはじめとして、聖書の各所には偽りよりもまっすぐな歩みが、私たちが祝福を得る秘訣であることを約束しています。

９節の「愛」は、神の愛(アガペ)を意味します。信じる者にあふれんばかりに注いでくださる、契約の愛については聖書全体で明らかにされています。「偽りがあってはなりません」とは、芝居や打算であってはならないという意。見せかけや打算的な愛は多く見られますが、私たちの心の中には空しさが残ります。「神の愛」と「偽り」とは両立しません。「聖い、生きた供え物」（１節)とされたキリスト者である私たちは、「清濁併せ呑む」態度では、罪に侵食されて、「偽りの父」（ヨハネ 8:44)である悪魔に、霊的な力を奪われてしまいます。これら悪しき力に勝利する秘訣は、救いの確信と聖霊に燃やされることです。霊的に沸騰し、主に隷属する生活に、無気力や偽りの入る余地はありません。

神の愛が注がれているなら、私たちは試練の中にあってもプラス思考の生活を送ることができ、またこれを古い殻が砕かれて霊的成長するためのチャンスと捉えることができます。聖霊の祝福の下で、悪を退け、希望をもって祈る生活が私たちの基本です。そしてキリストのからだの一部分として、他の人々を力づけ、逆に力づけられることで、ますます成長します。

私たちはキリストの血でつながった、神の家族です。共同体を建て上げるのに必要なのは真実な愛の交わりです。Ｉコリント書には本書と同様に、賜物に続いて、「さらにまさる道」である愛について説かれています(13:2-8)。 賜物は互いに仕え合うために与えられたのですから、真実に愛し合うことなしには宝の持ち腐れです。しかし自分のことだけでなく、共同体全体が勝利できるよう、偽りのない愛を適用すると、私たちもますます恵みを受けます。

7 月 12 日

「祝福の深みへ」

ルカ　5：1-11
山本　多恵師

祝福の深みへ～大漁の奇跡から学ぶことは？ ①神様の言葉に従ったときに、神様は豊かに祝福してくださる。
『しかし、イエスは言われた。「いや、幸いなのは、神のことばを聞いてそれを守る人たちです。」』（ルカ 11:28）
私たちの問題は「神の言葉を聞いて、それをどうするか？」　私たちが神様の栄光を受けさせていただく秘訣は、ここにある。御言葉を聞くだけではなく、「実際に自分に当てはめたとき」に初めて、私たちは神様の御業を体験していくことができるのです。

②罪の告白。悔い改め。
私たちも御言葉を聞くときに、「感動」ただそれだけで終わってしまってはいけない。
『神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。
神よ。あなたは、それをさげすまれません。』（詩篇 51:17）
「自分がどれほど罪深い者であるのか」それを正しく知ることが、救いへの第一歩。

③キリストを第一とする。
『彼らは、舟を陸に着けると、何もかも捨てて、イエスに従った。』（11 節）
彼らの生活の優先権がどこに移ったのかを示している。今までは、仕事第一の彼らだったのかもしれないが、今はキリスト第一へと変わった。それは、そうさせるほどすごい神の力、神の愛、ゆるしを心から知ったから。なにもかも捨てさせるほどの価値がここにはあり、そうしてもよいほどの喜びが彼らの心に満ち溢れていた。

自分の高慢や不信仰の罪を悔い改め、神様の御言葉に服従するとき、汚れた者にもかかわらず、神様は私たちも弟子としてくださる。私たちが日ごとに神様の前に出て、神様の御言葉を受け取り、それに従っていくなら、神様は大漁の奇跡のように、私たちの生涯にも、栄光を輝かせてくださる。

7 月 19 日

「善をもって悪に打ち勝つ」

ローマ 12:14-21

武安　宏樹　牧師

前回の９～13 節は信徒同士の交わりについてですが、今日の箇所は、囲いの外側に視点が向けられています。教会内での人間関係は、キリストを中心に和解を図ればよいですが、未信者の人には理屈では通用しません。２節にあるように、私たちは世の流儀に倣うのではなく、聖霊の助けによって偽りのない愛を彼らに与え続けていくべきです。

主イエスの山上の説教(マタイ 5:39,44)でも語られるように、私たちを迫害する人に対しての「祝福」と「祈り」によって、傷つけ合いの連鎖を断ち切ること。その模範は十字架上(ルカ 23:34)やステパノ(使徒 7:60)に見ることができます。後のパウロの回心と福音の拡大を思えば、効果は甚大です。

15～16 節は再び教会内の一致について挿入されていますが、これは兄弟姉妹との愛の訓練をまず受けることから始まるという意味があると思います。「ともに苦しみ、ともに喜ぶ」(Ｉコリント 12:25)交わりから、自尊心や軽蔑心を捨てて、ありのままの素晴しさを互いに受け容れるようになります。涙を共有する友の存在に励まされると共に、喜びの共有はさらに尊いことで砕かれていなければ不可能です。御霊による訓練を通して、私たちは全ての人のために祝福し祈るために、備えられていくのです。

17 節からは世の中への証しに戻ります。「だれに対してでも」は強調表現ですが、教会の中で練習すると未信者の人の祝福のためにも求めるようになり、さらに積極的に平和を築くための努力をするようになります(Ｉペテロ 3:11)。 与えられた限度は人それぞれ異なりますが、私たちの特権です(箴言 12:20)。 それは決して静的なものでなく、攻撃を受け止めた上でさらに善を行うのは、私たちが十字架の愛を深く知らなければ難しいでしょう。日々受けた祝福をもって、初めて相手を祝福することができます。

しかし限度を越えて攻撃してくる人には、「復讐の神」(詩 94:1,ナホム 1:2)のさばきに委ねなければなりません。神の怒りの機会を奪ってはなりません。「燃える炭火を積む」とは、私たちが彼らに愛を与えることで、彼が救いに導かれるための激しい痛みを神から与えられ、恥じ入るという意味。私たちに備えられた主の愛をもって、憚らず「良い行い」(エペソ 2:10)に励みましょう。

7月26日

「服従について」

ローマ 13:1-7

武安　宏樹　牧師

先週は「善をもって悪に打ち勝つ」と題して、未信者の方々や社会全体に愛と善行に励む必要を学びました。世の終わりまでは、神は霊的には信徒の共同体である教会に福音宣教を委ねています。同時に政治的には国家権力を通して世を治めていくことを委ねています。これは創世記1:26にあるように、神が人間に御旨に従って世を治めるよう命じておられるからです。世俗の権力と関わり合いたくないからといって、一切を断ち切って山中に籠もって生活するのは不可能ですし、無政府状態では安全に暮らすことができません。ですから地上のキリスト者は二重構造の下で生活をしているのです。

「存在している権威はすべて、神によって立てられたもの」とは、「神の権威＝地上の権威」ということではなく、常に正しいというのでもありません。矛盾が目につくこともありますが、私たちは神に委ねられた権威として喜んで従うことで、社会的信用を得ることができるでしょう。

この手紙が書かれた時代はそうでもありませんでしたが、直後にはローマ皇帝カイザルが自分を礼拝するよう強要しました。国家権力は罪ある人間の集まりであるがゆえに、暴走することが多々あります。このような霊的戦いについて、パウロも予見しなかったわけではありません(Ⅱテサロニケ 2:6-11)。キリスト者は神への忠誠を脅かす権力に対しては、「人に従うより、神に従うべき」(使徒 5:29)と抵抗すべきで、両者のせめぎ合いの中で生きています。教会史を振り返ると、国家権力はたびたび教会を影響下に収めようとしたり、教会が分離のために抵抗したり繰り返される中で、私たちがどこで一線を引くかは難しい問題です。世の背後から糸を引くのは悪魔であることを覚えて、私たちは「蛇のようにさとく、鳩のようにすなお」(マタイ 10:16)であるべきです。

そうは言っても、私たちの基本姿勢としては、上に立つ人々を尊敬し、祝福を祈り、従順を表すことです。キリスト者は権利よりも義務を進んで果たし、公正と平和を証しする者です。終わりの日の霊的闘いの激しさを覚え、悪魔に隙を与えず平安に日々を過ごすためにも、落ち度のない公共生活を送ろうではありませんか(Ⅰテモテ 2:2)。為政者や上司のために、世界平和と弱者の救済のためにとりなしつつ、それでも導かれたら臆せず抵抗しましょう。

8 月 2 日

「律法を全うする愛」

ローマ 13:8-10

武安　宏樹　牧師

前回は、「権威に対する従順」ということでしたが、今回はもっと近くの、「隣人」との関係についてです。

８節の「借り」は「負債」の意。借りることを禁じているのではありません。「借りっぱなし」ではいけないということです。物品を期限までに返さないと親しい交わりを破壊しかねません。ただし例外は、「互いに愛し合う」こと。それでは、私たちは人に良くされっぱなしでいいのかと言いたくなりますが、主イエスは「私があなたがたを愛したように」(ヨハネ 15:12)と付け加えました。神の愛は無限かつ無条件です。それに対して、私たちは相当分の愛も善行も提供不可能であり、最初から神に対して返済不能の負債を負っているのです。神の愛と人の関係は世の「Give & Take」の関係でいえば、甚だ不釣り合いです。

私たちは主体的に愛することによって、一生かけて愛の負債を負って歩むのです。この負債は他のと異なり、重荷とはなりません。そして愛の負債を喜びをもって誠実に返済しようと努めるならば、自動的に全ての律法の要求を全うすることになるというのです。

９節前半は十戒後半の社会的関係についての引用です。「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」(レビ記 19:18)の戒めは申命記 6:5 と共に、律法全体を要約するといいます(マタイ 22:40)。「最高の律法」(ヤコブ 2:8)ともあります。愛の負債を返済しようと思うならば、姦淫. 殺人. 盗み. 貪りの罪は起こり得ません。神の愛の中に生きてこそ、神の律法の要求を満たすことができる。そのためには「圧倒的な負債」と思えるか吟味し、自分を縛る古い肉の性質に死ぬこと。これは霊的成長(聖化)の中で漸進的になされるものですが、同じことが社会的関係にも適用されます。神の愛で隣人. 社会. 敵を愛するのです。

神の愛は決して人を傷つけず、時には愛で、時には拳骨でご自分の愛する者を育ててくださいます。信仰生活を難しく捉えると、人にもあれこれ律法を要求しますが、愛の負債は信仰を単純化します。「全う」は「満ち溢れる」の意(エペソ 1:23)。溢れる愛と霊的祝福は人間的に不可能な律法遵守を全うさせ、なおも聖霊によって愛と義に生きようとする飢え渇きを起します。

8 月 9 日

「キリストにある教会」

エペソ 1：3-14

武安　宏樹　牧師

エペソ書は、パウロが獄中から書き送った手紙です。内容はキリスト論から教会論へ展開し、「キリストの満ち満ちた身たけにまで達するため」(4:13)とキリストの肢体である私たちの目的について要約しています。今日の箇所には「キリストにあって」という原語が 10 回も登場します。劇的な回心を経験したパウロには主こそ全てであり、救いの素晴しさについてほめたたえつつ、「父．子．聖霊」の３点から、創造～終末の時系列に沿って、力強く語ります。

①　神の選び（３～６節）

憐れみ深い神は、キリストを「ただ信じるだけで」義とされる救いの道を備えてくださいました。私たちは単に自分の選択ではなく、永遠の昔から存在する深遠な神の選びの計画によって救われたのです。私たちは「選手」として地上の生涯を主と共に雄々しく戦い抜く者です。

②　キリストの贖い（７～１２節）

「贖い」とは「代価を払って解放する」意で、律法では動物のいけにえの血が来るべきキリストの血の型となっています(レビ 17:11)。ここで「罪」＝複数形ですが、「贖い」「赦し」＝単数形であることは要注目です(ヘブル 9:12/10:10)。自分の全ての罪の債務証書が、十字架上に釘付けにされたことを信じる人は、霊的な解放が与えられ(ガラテヤ 2:20)、また「知恵」すなわち地上で生きる上での霊的洞察が与えられます。「奥義」とは「時」(複数形)満ちて、救済計画がキリストの下に実現し、一つにまとめられる素晴しい日のことについてです。

③ 聖霊による保証（１３～１４節）

信じた者の内に降られて、封印されて働かれるのが聖霊です。聖霊の働きによって私たちは神の知恵を知り、実行することができます。「御国を受け継ぐ保証」とは「婚約指輪」の意ですから、「時満ちて」私たちが御国を受け継ぐ前味をいただいています。この聖霊の働きを通して、初代教会の力強い宣教の働きが拡大されていき、私たちの内に炎のように臨在してくださいます。

8 月 16 日

「キリストを着なさい」

ローマ 13:11-14

武安　宏樹　牧師

「霊的な礼拝」(12:2)の生活について、信者→未信者→社会的権威→隣人へと愛し仕える生活の同心円状の祝福が語られてきました。これらは主との親しい交わりの中で、カーナビのように現在地を確認しつつ進む中で起こることです。今日の箇所は未来の私たちが見定めるべき地に視点を転じています。

「時」(カイロス)とは、特別かつ重大な出来事の時を意味します。キリスト者にとっては終わりの時の出来事、つまり主の再臨と共に天に上げられる救いの究極的完成ですが、その時については誰にも知らされていません(マルコ 13 章)。私たちはいつ主が来られてもよいように備える必要があります。初代教会は苦難に直面する中で、再臨待望の緊張感をもっていました。21 世紀の今日を見渡せば、数々の前兆は起こりつつあることを覚えます。

12 節では、夜の闇が最も濃い未明の様子にたとえられています。この時に「暁の光のように」(ホセア 6:3)現れる主の栄光とは、どれほどのものでしょうか。闇の中で行われている善行も悪行も全てが白日の下に晒される時です。私たちはこの夜明けを待ち望んで闇の中を行進する者ですが、「光の子」であるがゆえ、幸い懐中電灯と共に歩みを進め、自己の点検をすることができます。「戦闘の教会」の一員として、御国に凱旋する兵士のように胸を張って帰りたいものです。「眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔う」(Ｉテサロニケ 5:7)ですが、私たちは「光の子」として、本書で学んできた信仰と愛に根ざす生き方と、終わりの日の祝福を待ち望む生き方を行いつつ、闇を一つ一つ照らしていきます。

13 節の「着る」とは、密儀宗教で神々との結合を表す言葉ですから、11 章の「接ぎ木」よりもさらに密接さが伝わります。光として世に来られ、闇の力に打ち勝って、天に凱旋され、今も休むことなく私たちを助けてくださる主と一つになることで、私たちは勝利の生活を送ることができます。マタイ 25 章には花婿を迎える花嫁のたとえ話がありますが、今の私たちは所離れた婚約中の者ですが、終わりの日には同じ場所で真の一体となる希望があるのです。

8月23日

「教会会議の必要」

使徒15：1-21

武安　宏樹　牧師

本章は、異邦人伝道が公認されて福音が全世界に拡がっていく要所です。　割礼の是非については、アンテオケ教会の中で「律法と福音」の関係として神学的に緊急に解決すべき問題となっており、さもなければ異邦人伝道や教会の一致に支障が出かねない状態でした。話し合いの終盤に発言したペテロとヤコブの以下の発言を通して、聖霊に導かれた会議を学ぶことができます。

①　ペテロの発言（７～１１節）

彼の発言は自分を通して起こされた体験に裏打ちされていました。10 章で異邦人コルネリオとの邂逅により幻の謎が解けて、神が異邦人にも救いの手を伸ばそうとしていることを確信しました。このことは彼がペンテコステにおいて「わたしの霊をすべての人に注ぐ」（ヨエル 2:28)と実は無意識のうちに引用していたことでした。聖霊がキリスト者のしるしとなった以上、もはや神は割礼の有無に関心を持たれない。律法にこだわるのは結構だが、異邦人に向かって救いの条件とするのは見当違いも甚だしいと断言しました。正論ですが、このまま閉会したら実際に両者が一致するのは困難だったでしょう。

②　ヤコブの総括（１２～２１節）

エルサレム教会で律法に忠実な指導者として尊敬を集めていたヤコブは、アモスの預言を引用しつつ、「他の人々＝異邦人」として、神が終わりの日に新しいことをなさろうとしているゆえに、古いユダヤ教の規範は異邦人の救いに適用の余地なしとしました。立場上彼の発言は甚大な説得力を有します。その上で両者が交わるようになるために、異邦人が避けるべき事柄を勧め、最低限のユダヤ的倫理基準を共有するという折衷案をまとめました。主の愛をもって価値観の違う両者が互いに配慮し合うべきことを勧める、画期的かつ実際的な案でした。この会議こそ使徒主導でなく、諸意見に耳を傾けつつ、聖書の預言と祈りの中で、聖霊に導かれて決議された会議の好例です。　私たちは自分の意見こそ最善と思いがちですが、主は人間的な知恵と計画とをはるかに越えて、平安の内に素晴しい結論を導いてくださるのです。

8 月 30 日

「宣教のための一致」

ピリピ 1:27-30

武安　宏樹　牧師

① 教会の中での一致（ピリピ１：２７）

パウロは牢獄からピリピ教会に宛てた手紙の中で、祈りつつ願っていることは、教会の中に一致があることです。それは組織的ではなく霊的一致です。イエス．キリストを信じた人は、神の子(ヨハネ 1:12).聖霊の宮(Ｉコリント 6:19)となりますから、私たちは他人であっても神の家族.主にある兄弟姉妹として、一致すべき基盤を与えられています。聖霊の現れは個々人で異なりますが、全体として益となるように働かれます。
霊的一致は素晴しいことですが、それは教会が内向きになることをよしとしません。なぜなら教会には、福音のために世と闘う使命があるからです。イエス．キリストこそ模範です(2:6-11)。サタンの誘惑(マタイ 4:9)に背を向け、十字架の死→復活→昇天において、勝利宣言をされました。私たちはこの十字架の福音を伝える者として、教会から派遣されようとしています。私たちの霊的一致とは、世の人に「イエス．キリストは主」と伝えていくミッションによります。宣教の最前線でも、後方支援でも、このために私たちが一致していく時に、たとえ苦しみの中にあっても、大きな力と喜びが生まれます。

②　教会を越えての一致（エペソ１：１０）

さらに、神のご計画は各個教会の働きを統括してもっと大きなものです。私たちは愛宕山教会の一員として、キリストのからだにつながっていますが、同じことが、たとえば愛宕山教会は同盟教団の、同盟教団はもろもろの教団教派から成る公同の教会の一員としてつながっています。それぞれの教派には強みがありますから、それらを持ち寄って宣教のために協力していったら、もっと多くの人々がキリストのからだの素晴しさに目が啓かれるでしょう。「宣教協力」は同盟教団の三本柱の一つであり、現在の祝福の秘訣と言えます。東海地区の開拓伝道においては、ＳＡＭＪとの協力なしには語りえません。パウロとバルナバの派遣が発端ですが(使徒 13 章）、宣教団体は「第２の決心」をした献身者の集団ですから、地域教会と恵みを提供し合うことで、有機的な協力伝道ができます。宣教協力と一致した祈りこそサタンを締め出します。

9月6日

「私たちは主のもの」

ローマ 14:1-12

武安　宏樹　牧師

12 章「キリストのからだ論」において信徒同士の関係に「尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい」(10 節)、「高ぶった思いを持たず～自分こそ知者だなどと思ってはいけません」(16 節)と勧められています。

ローマ教会ではユダヤ人と異邦人の間で、肉と特定の日に関しての習慣の相違という問題が起きていました。このユダヤ人たちは「救い」よりも「律法」の方が第一になってしまうことから、パウロは「信仰の弱い人」と呼びます。彼らは福音によってまだ解放途上にいるので(ガラテヤ 5:1)、異邦人の方が単純な信仰でした。とはいえ、「不信仰」と断罪したら、教会は分裂したでしょう。

主イエスは「さばいてはいけません」(マタイ 7:1)と言われました。私たちもすぐに他人を先走ってさばこうとする者です(Ｉコリント 4:5)。しかし人を正しくさばく権限を有するのは神のみです。「あとの者」「先の者」(マタイ 20:16)とありますが、個人的にも民族的にもどちらが救いに近いのかは、神のあわれみのゆえに、私たちに知る由もないことです。さばきは神よりも自分を上におきますが、神の最善のさばきを待ち望むならば、「すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至る」(11:33-36)と、確信が賛美に変えられるでしょう。

私たちが主と共に十字架につけられたのは、価値観を含めた人間的な思いに死ぬためです。互いを蔑み、批判するようでは、同じ主を信じる者として、自分にまだ死に切れていないのです。主イエスは些細なことでさばく者を、「偽善者」(マタイ 7:3)と呼びます。私たちは人のあらさがしではなく、よみがえりの主を一心に見上げなければなりません。「確信」とは堅い信仰のことです。祈りと御言葉による確信があれば、無責任な批判は生まれません。中途半端だと他人の足を引っ張るのです。私たちは人をさばく前にやるべきことは多くあります。神の愛の「広さ、長さ、高さ、深さ」を体現しつつ、違いを乗り越え、互いに尊敬と刺激をし合う信仰共同体こそ、素晴しいのです。

9月13日

「つまずきを与えない」

ローマ 14:13-23

武安　宏樹　牧師

前回は、私たち各人は主のものであるからさばき合ってはならず、神の愛に根差した寛容さを養う必要性について語られました。今回は、さばかないだけでなく、神と人とに責任をもって仕えるキリスト者のあり方を語ります。

「つまずき」とは罪を犯す原因となるものを指します。異邦人にとっては些細なことでもユダヤ人にとっては大きいことで、エルサレム会議(使徒15章)で論争となりました。パウロ曰く「汚れているものは何一つない」。しかし、長年の律法的慣行から避けてきたのに肉を強要することで、ユダヤ人たちの良心が傷つき神との交わりに支障をきたすなら大問題である。私たちの生活においても聖書的に白黒つけ難い中性的事柄は多いですが、「多勢に無勢」で「彼らの弱い良心を踏みにじる」のはキリストに対する罪です(Ⅰコリント8:13)。

世の中でも教会内でも、全て赦されているのだから自由奔放に何をしてもよいのかというと、極端に言えばそうですが、「すべてのことが徳を高めるとはかぎりません」(Ⅰコリント 10:23)とパウロは語ります。私たちに与えられた自由は、お互いを建て上げて、徳を高め合う霊的成長に資するべきものです。自己充足的信仰から脱却して、「すべての人の奴隷となる」(Ⅰコリント 9:19-23)喜びをもって、私たちは他者と共同体を建て上げることができるのです。

誰もが信仰の足跡を誇りとして持っています。けれどもそれは、主との間での信仰＝確信として、自分で握りしめずに日々更新されるべきものです。「自分の決心にやましさを感じない人は幸いです」(22節新共同訳)とありますが筋を通しつつも柔軟な信仰が、「弱い人」には内なる確信が、一層必要です。

「キリスト者は全てのものの上に立つ最も自由な主人であって、だれにも従属していない～キリスト者は全てのものに最も奉仕するしもべであって、だれにも従属している」

(マルティン. ルター著 石原謙訳「キリスト者の自由」)

私たちは 100%自由であり、100%しもべです。つまずきを与えたら神と人の前に悔い改めて、大胆かつ謙虚な信仰者とされましょう(ガラテヤ5:13-14)。

9 月 20 日

「年老いてもなお」

詩篇 92：13－16

武安　宏樹　牧師

わが国は数字上では世界一の長寿国となりました。しかし、聖書の中では人間の生命は限りあるものであり(詩篇 90:10)、誰でも肉体の死を迎えます。けれども「最後の敵である死も滅ぼされます」(Ｉコリント 15:26)とあるように、主を信じる者に、肉体の死は主の似姿に変えられる聖化の完成＝栄化であり、天に上げられて御顔を拝する至福の時。ゆえに歳を重ねることも肯定的です。

どこの教会でも高齢者が元気なのは素晴しいことです。90 代でも主のため力強く活躍された方として、既に召天された本田弘慈師や鈴木留蔵氏のことを思い起こします。98 歳を迎える日野原重明氏(聖路加国際病院理事長)は人生を３つのステージに分けられるとし、「第３ステージ」において高齢者がいかに生きるべきかの一つに「生きがい」を挙げます。与えられた十分な時間の中で、趣味や旅行や孫の世話などの、生きがいをもつのは若さの秘訣です。けれどももっと素晴しい生き方は、神の大庭において信仰に生きることです。肉体は衰えても、内なる霊は衰えない。神に信頼する人は、若い頃に咲かなかった新しい実がつき、みずみずしく繁栄することが記されています(14 節)。

神との交わりを通して力を得る私たちですが(イザヤ 40:31)、もう一つの特権は、教会の交わりが与えられていることです。世代を越えた励まし合いを通して、霊的交わりはもちろんのこと、脳の活性化(賛美. 祈り. 語らい e.t.c.)になります。また信仰的にも人生経験豊富ですから、若い人はじめ教会全体を励ますことができるでしょう。高齢者が元気だと、教会が活性化されます。

モーセは 120 歳で死ぬまで元気でした(申命記 34:7)。出エジプトを成し遂げましたが、約束の地には入れませんでした(ヘブル 11:13)。けれども最後まで導かれる主に信頼し、目は澄んでいました。詩 92 篇は、神に信頼する者が栄えることを賛美しています。大事なのは、何ができるか「doing」ではなく、主の前にどうあるか「being」です。生き方を存在論的に証しする人として、再臨の希望を胸に、夢をもった高齢者(ヨエル 2:28)が増え拡がればと願います。

9 月 27 日

「あなたは大丈夫・・・？」

マタイ 25：1-13

山本　多恵　師

私たちの信仰生活は、この娘たちのように眠りこんでしまい、信仰のともし火が消えそうになってしまうこともあります。油が切れること…油断。「大丈夫だろう」という私たちの心の隙間です。そこに悪魔がつけこむのです。まさに、油断大敵です。
そのような中でも、再び来られるイエス様を喜び迎える者となることができる、賢い娘たちが持っていた「予備の油」とはいったい何でしょうか…？

それは、イエス・キリストの十字架の恵みです。予備の油を持っているということは、自分の中になお何らかの信仰的蓄えがある、ということではなくて、イエス様の十字架による罪のゆるしの恵みを知っており、それにより頼むことができる、ということです。
それ以外に、眠りこんでしまう私たちがイエス様を喜び迎える者となる道はないのです。
この油は、人に分けてあげられるものではありません。私たち一人一人が、神様の前に自分の信仰を問われるのです。戸は閉められたら二度と開きません。
ですから、この恵みを今すぐ自分のものとしてください。私たちはその日、その時がいつ来るか知らないからです。

自分のどのような罪や弱さにもかかわらず、このイエス・キリストの十字架による自分の罪のゆるしの恵みは揺らぐことがないのだ、ということを知っているということが、本当の意味で目を覚ましているということなのです。

10 月 4 日

「忍耐と励ましの神」

ローマ 15:1-6

武安　宏樹　牧師

キリストのからだ→聖霊→教会とテーマが発展してきましたが、15 章では戻るというよりは、教会の向かうべき方向としてイエス・キリストの御姿へと発展します。神学も大事ですが、諸問題に「イエスさまならどうするか？」と常に立ち帰る必要があります。

強い人が弱い人を配慮すべきことを前章までで学びました。さらにパウロは「になう」ことを勧めます。「になう」は主が十字架を負われたのと同じ動詞です。イエス．キリストは神の子としての身分に固執せず、罪人である私たちとの間に一線を引かず、背負ってくださいました。ご自分のいのちをも、投げ出してくださった主の愛こそ私たちの模範です(マルコ 10:45)。愛にはいろいろな形があるので(Ｉテサロニケ 5:14)、時には忠告も必要ですが、さばきとの相違は、主の愛に基づく寛容をもって弱い人の存在自体を受け容れているか､その人の存在が神の栄光のため用いられるのを期待しているかどうかです。

主を模範として弱い人を背負うことは重く感じるかも知れませんが､益としてくださるのは神の働きによります(8:28)。だから結果は神に委ねつつ、私たちは通りよき管となることを求めればよいのです。主イエスの生涯は、十字架に向かう中で苦しみに遭いましたが、それは鬱々としたものではなく、喜びに満ちていました。その喜びこそ、神への信仰と希望から来るのでした。

「昔書かれたもの＝旧約聖書」で語られていることは、厳しいさばきよりも、神の忍耐と励ましで満ちています。御言葉の交わりが薄くなると、人間的なさばきが出てきます。一人一人が主の御姿を見上げることは種々のプログラムに優ります。自分の見方を十字架につけて、主と苦しみを共にすることで、忍耐と励ましが生まれ、彼方には希望が見えます。「練られた品性(5:3-5)＝御霊の実(ガラテヤ 5:22-23)」こそ有効です。使徒書に初代教会の「心を一つ」にする姿が頻出します。そしてみな共に賛美を捧げることこそ教会の本質です。

10 月 11 日

「望みの神」

ローマ 15:7-13

武安　宏樹　牧師

12 章のキリストのからだ論から、ユダヤ人と異邦人、強い者と弱い者の一致のヴィジョンと続く箇所のまとめです。前回話したように、もろもろの教会論はイエス・キリストの賛美へ導かれるべきものです。２箇所引用します。
「神は御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。」
「神はキリストにおいて､天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。時がついに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあって一つに集められることなのです。」(ヘブル 1:1-3/エペソ 1:3-12)

私たちは神の創造～贖い～終末に至る壮大な計画の中で､神の栄光を現すべき者とされています。この望みについてどれくらい喜んでいるでしょうか｡聖書の中で神の愛と信仰と希望とは一体です(詩 39:7/1 ペテ 1:21/1 コリ 13:13)。世の人の希望の全てには枕詞に「自分の」がつきます。しかし神に背を向けた者を待ち構えるのは永遠の滅びです(6:23)。人殺しである悪魔(ヨハネ 8:44)は、キリスト者には惑わしを仕掛けますが、私たちは立ち向かいます(エペソ 6 章)。かくて永遠のいのちの素晴しさと、世の悪しき勢力の忌まわしさを覚えつつ、教会は天の御国の入口として、世へのとりなしの祈りをもって存在します。

７節でパウロは､私たちを受け容れてくださった神の愛をもって､互いに受け容れ合うことをすすめます。聖なる神が罪人に差し伸べた手に比べれば､私たちの相違など些細なものです。天にある希望に目を向けると､私たちは人間的なさばきや失望から解放されます。神の賜物である人間関係を通して、私たちは愛と赦しを学びます。旧約時代において、神は預言者を遣わしても立ち帰らない罪人の反抗を忍ばれて､一時的に国家を取り去りはしましたが､救いの計画を帳消しにせず、救い主を待ち望むよう民を励ましつづけました。神に望みをおく交わりは逃避に非ず、多くの苦しみの中で前進するものです。

13 節では、罪からの解放の喜びと平和(現在的望み)と、再臨までの世の戦いを切り開く聖霊の力(将来的望み)の両方が語られています。望みは神同様に目には見えません。しかし 2000 年前に御子の姿を通し、今も祈りと御言葉の交わりの中で、あらゆる手段で神は望みを教えられます(エレミヤ 29:11-13)。

10 月 18 日

「パウロの務め」

ローマ 15:14-21

武安　宏樹　牧師

パウロは本論で信仰義認について論じつくし、満足しつつ結論に入ります。ローマ行きを熱望しつつも直接関わったことがないためか、差し出がましい印象を与えぬようまず教会の働きについて敬意と感謝を表しています(1:8)。３回の伝道旅行を通じ世界を駆け回り、多くの教会を開拓した足跡を思えば、福音宣教の大功労者と言っても過言ではない彼が、謙遜な表現をもって神が自分を通して行われた働きでの置かれた立場と恵みを振り返っています。

1.　「祭司」として（16～17 節）

16 節には旧約祭儀の語が多く出てきます。私たちの想像する使徒パウロの姿は活動的なものですが、意外なことに自らを「祭司」だと称します。異邦人の救いをもって神に受け入れられる供え物とする。つまり神と異邦人の間のとりなし手である。この「伝道者＝祭司」なる発想は、福音への深い確信から単に伝道者としてもろもろの霊的戦いに挑むよりも、聖霊のきよめによって神に喜ばれる異邦人のいけにえをささげるという、「異邦人伝道＝礼拝」との大きな宣教ヴィジョンとなりました。私たちも「万人祭司」（Ｉペテロ 2:9)として与えられた場で神に仕える者です。「仲介者」との認識が、働きや実を誇る誘惑を退け、世の人と弱さを共有しつつ主を誇る者（Ⅱコリント 10:17)とします。

2.　「御霊の力」によって（18～21 節）

パウロは命がけの伝道に駆り立てたものが自分の力ではなく、御霊の力であることを痛感していました(Ｉコリント 2:4/Ｉテサロニケ 1:5)。激しい霊的戦いを通らされても、御霊のよき循環の中で次の伝道へ導かれ、わずか 10 年足らずで、「福音をくまなく」伝えることができました。「エルサレムから始めて」とは、神の救いの計画(イザヤ 2:3)や聖霊降臨(使徒 2 章)を出発点とし、その中に自分の働きを位置づける彼の謙遜さがうかがえます。加えて御霊による未伝地伝道への情熱がありました。これも神ご自身の救霊の思いが「言いようもない深いうめき」(8:26)によって駆り立てたのです。私たちも臆せず(Ⅱテモテ 1:7-8)御霊の力により、一人でも多くの人に福音を聞くチャンスを提供しましょう。

10 月 25 日

「献金の恵み」

ローマ 15:22-29

武安　宏樹　牧師

1.　ローマを宣教拠点に(22～24 節)

パウロは東の方はひと区切りつけ、今度は西の方に向かおうとしています。西端イスパニヤに至る福音の処女地帯を眼前に、大都会ローマに拠点を築きたいと彼は考えました。ローマは未伝地ではありませんが、現地教会との関係作りで総督に福音を伝えていく思惑もありました。しかし政治的目的以上に、霊的交わりの拠点としてのローマ教会を想定しました。結局彼は囚われの身として、ローマ総督に証しする機会が与えられました(使徒 24～26 章)。

2.　エルサレム行きの目的(25～27 節)

念願のローマ行きの前にやるべきこと。それは一旦エルサレムに戻って、干されて窮乏に陥った信徒たちのための献金を届けることでした。パウロは各地で呼びかけ、マケドニヤ(Ⅱコリント 8:2-5)とアカヤの教会は喜んで捧げました。彼の西方へのヴィジョンによればエルサレム行は寄り道に思えますが、これを通して異邦人とユダヤ人双方の有機的交わりの実現を企画し、ローマ教会も献金に加わることを望みました。「醵金」の原語「コイノニア」は、信徒相互の交わりを意味します。「受けるより与えるほうが幸い」(使徒 20:35)とあるように、犠牲を惜しまず捧げあう交わりを通して、豊かな刈り取りとキリストのからだに連なる素晴しさを認識することができます(Ⅱコリント 9 章)。。

3.　祝福を分かち合う(28～29 節)

パウロにとって献金を渡すことは事務的ではなく、重要な出来事でしたが、多くの人が思い留まるよう勧めたように、エルサレム行は危険を伴いました(使徒 21 章)。しかし伝道の最前線に立っている彼にとって、エルサレムと異邦人の地域の心が通い合わないのは耐えられないし、たとえ死んだとしても祝福がネットワークされたら、「一粒の麦」(ヨハネ 12:24)になると確信したのでしょう。私たちも「灯台下暗し」ではなく、送り出している教会や家族のことを覚えて奉仕することで、平安の内にヴィジョンに突き進むことができます。

11月1日

「祈ってください」

ローマ 15:30-33

武安　宏樹　牧師

念願のローマ行と西方への宣教を後に回してエルサレム行きを優先させたパウロでしたが、危険は百も承知でした。「虎穴に入らずんば、虎子を得ず」とありますが、恐れの中で御霊に奮い立たせられて踏み出そうとしています。

未だ顔を合わせたことのないローマの兄弟姉妹に向かい、パウロは「切に」祈りの要請をします。一つ目の理由は、彼が自分の肉の弱さと戦いの多さを感じているからです。二つ目の理由は、多くの祈りのただ中で御霊の働きが顕著に現れるからです。彼は単に殉教を望んだのではなく、生死は結果論で、使徒として御心を真剣に行うために、多くの祈りを必要としていたのです。

前回が献金を通しての物質的な共有とすれば、こちらは祈りを通しての霊的なネットワークと言えます。主の御名によって祈り合う霊的な交わりは、他の宗教で得られないものです。世界中どこであっても臨在の主に拠り頼むことができます。御霊による祈りとすべての人に対するとりなしは、共同体全体の勝利となります（エペソ6:18）。「絶えず祈れ」（Ⅰテサロニケ5:17）とありますが、私たちは祈りを通して成長し、祈るべき必要は無限にあります。

互いの熱い祈り合いを経てローマでの邂逅の暁には、初対面のよそよそしさではなく、大事な奉仕を終えた満足感からとめどなく語り、励まし、祈り合う交わりとなることでしょう。「いこい＝be refreshed(NIV)」とあります。この交わりは次の西方行きへの充電となることでしょう。パウロの心の故郷、それは転々とする使徒としてもはや地理的なものではなく、天の御国でした(ヘブル11:13,16/ピリピ3:20)。そして天の前味として、主にある兄弟姉妹と各地で祈りを捧げ合う交わりの中こそが、彼にとっての「いこい」と充電の場だったのではないでしょうか(マタイ18:20)。最後に彼は祈りの懇願だけでなく、「平和＝シャローム」(33節)の祝祷をもって、熱い祈りを捧げるのです。

11 月 8 日

「背信のいやし」

エレミヤ 3:21-4:4

原田　和典　師

エレミヤ書は、破滅に進む南ユダ王国末期にも注がれ続けた、神の深い愛を記した預言の書です。22 節の「わたしがあなたがたの背信をいやそう」は、興味深い言葉です。背信は、裁かれるか赦されるもの、いやすものではありません。背信は、ただの偶像礼拝ではなく、人が本当の人として、人らしく生きることができない状態です。人々を、症状が酷くなる一方の、重い病気のように見ておられるのです。

1. 背信をいやされた民

偽りの神の祭りは、一時の快楽と共に過ぎ去り、哀願の声と悲惨な結果だけが残りました。勤労の実と財産、将来の希望である子を失いました。失望に伏していると、信じられない神の語りかけが聞こえてきました。『背信の子らよ。帰れ』『帰るのなら、わたしのところに帰って来い。…迷うことはない』。神は、民が伏し続けることではなく『主は生きておられる』と告白することを望まれます。自分ではどうにもできない罪から、救い出してくださいました。民が、主を崇め、恵みに満足すると、回りの国々の民も主の恵みに満足し、主を誇るというのです。さらに「耕地を開拓せよ。いばらの中に種を蒔くな。」「心の包皮を取り除け」と命じられます。神の恵みによって完全に新しくされ、目先の満足の覆いを取り除き、主の民の使命に生きるよう命じられるのです。

2. わたしのいやし

『背信のいやし』とは、民が偽りを知り、主に帰り、本当の使命に生きるように導くことでした。御旨を知りつつ従えない私たちも、「偽りを知り」「主に帰り」「使命に生きる」なら幸いです。自分自身が魂のいやしをいただき、生活上の具体的な罪から解放され、世に対してまことの救い主なるキリストを示す使命を与えられているのです。この使命にふさわしい者として育まれるため、背信のいやしの恵みをいただきましょう。

11 月 15 日

「主にあって」

ローマ 16：1-6

武安　宏樹　牧師

16 章は手紙のあいさつ文です。パウロの使徒としての働きは個人的なものではなく、多くの人の祈りと協力を得てすすめられた点で、一つの事業ということができます。人の事業は中心の人が旗振り役となりますが、神の事業の主役は神です。だからパウロはじめ全てのスタッフは仕える者であります。自分で人を集めると扱いやすい人ばかりを集めようとしますが、神の送ってくださる助け手は、想定外の素晴しい働きをしたり、的確な助言を与えます。

1. 女執事フィベ（１～２節）

執事とは教会で霊的. 物質的な指導をする立場で、当教会では役員がこれにあたります。推薦文からパウロが彼女を自信を持って送り出そうとしていることがわかります。それは彼女がこれまで提供した多くの助けに比べれば、先方でどんな助けを受けても、大きすぎはしないと確信しているからです。フィベの働きを通して、教会内で婦人の働きの大きさを思います。パウロは神の創造の目的に従い婦人が助け手として活躍するのを、願っているのです。

2. プリスカとアクラ（３～５節）

この夫婦については使徒 18 章に出てきます。天幕作りの職を持ちながら、御霊に導かれて転々としつつ伝道を助けました。妻が先に記されているのは、より大きな奉仕をしたからでしょう。「自分のいのちの危険を冒して」助けてくれたことにパウロは多大な恩義を感じています(ヨハネ 15:13)。彼らはユダヤ人でしたが、人種を越えて異邦人の教会も感謝をしていました。十字架の意味を理解し、家の教会での臨在ある証しと交わりが用いられたことでしょう。

3. その他の人々「主にあって」(６～１６節)　他にも多くの兄弟姉妹を通して、助けと励ましがパウロに与えられました。「主にあって」とは、状況的に出会うはずのない人と神の導きによって引き合わされることで、神の事業における御手の素晴しさを覚えたことでしょう。「一期一会」でも同じ時と所で与えられる交わりを喜んで受けたいものです。

11 月 22 日

「ヤベツの祈り」

Ｉ歴代 4：9-10

武安　宏樹　牧師

Ｉ歴代誌１～９章は系図ですが、谷間の百合のように異彩を放つのがヤベツについての記述です。無名でも信仰的に特筆すべき人物だったのでしょう。彼の名は「苦しみ」の意です。不遇な出生だったのか一説によれば私生児とも言われます。人生において恵まれない状況を克服した人は、少なからず存在します。しかし著者が言いたいのは彼の努力ではなく、信仰についてです。

「私を祝福してください」との祈りに違和感を覚えるとすれば、御利益的とのイメージが私たちにあるのでしょう。彼が貪欲に神を求めたのは本当です。しかし「御手が私とともにあり」とは、彼の信仰告白および献身の表明です。彼は全く自分のためではなく、純粋にこの短い祈りをひたすら祈りました。聖書中に祝福は天地創造から始まって頻出します。主に従うなら祝福、拒むならのろいが与えられるのが旧約での原則です。キリストの福音こそ見える形で与えられた愛と祝福のしるしです。だから正しい恐れをもって祝福を乞い求めるならそれは間違った祈りではないし、むしろ積極的に祈るべきです。

幼時は兄弟より劣っていても、神から用意されている祝福の力を確信して、右にも左にも逸れず一心に信じたヤベツは、ついに兄弟たちを凌駕しました。苦しみを経験しながら祝福を戴くことで、いやされて感謝するようになる。感謝が自分に留まることを良しとせず、地境が拡げられて家族や周りの人々や予期せぬところまで祝福のフィールドが拡げられていく。彼の中に培われてきた祈りにおける力強さと、打たれ強い信仰が開花しました。偽りの謙遜は不信仰に通じます。神の祝福を強奪せんとばかりに激しく求めることです。「祈らないことは最大の損失」と言われます。何でも打ち明けて祈るならば、神が取り扱ってくださいます。とりわけ即効性と影響力があるのがヤベツの祈りです。アブラハム（創世記 12 章）の如く祝福を受けて立ち上がりましょう。

11 月 29 日

「悲しみの人」

イザヤ 53:1-3

武安　宏樹　牧師

私たちは「イザヤ 53 章＝主イエスの苦難」とイメージしますが、公生涯よりも約 750 年も前の預言を通して、まだ見ぬ救い主の有り様が斯くも具体的に語られていることに驚かされます。しかし後のバビロン捕囚期やローマ帝国支配に置かれたユダヤ人が思い描いていたのは、政治的.経済的に解放を与えてくれる救い主＝ヒーローの姿でした。彼らにとっても私たちにとっても「苦難のしもべ＝救い主」と結びつくのには、ギャップが存在すると思います。

１節は 52:15 を受けていますが、原語では疑問詞が先頭で強調されます。これは疑問というよりも強い感動の意です。時期もその姿もサプライズ。 「御腕」はモーセを通して紅海が開かれた奇蹟を想起します(出エジプト 15:21)。私たちの信仰は人間的な努力に非ず、上からの力によって与えられるのです。

２節では太陽に向かって伸びる若枝(ゼカリヤ 6:12-13)と地中に向かう根の、相反する２つが登場します。神の前には若枝のようであっても、人の目には顧みられない根。この両者に何の関わりがあるのかと思わされますが、神と隔絶された罪人の思いは若枝の如く上昇志向である一方、霊的には砂漠のように枯渇しています。反対に「見とれるような姿、輝き、慕うような見ばえ」の美しい方が私たちの内に居られると、自分を受け容れて、愛と恵みを受けている者として、苦しみや悲しみを覚えている人のために重荷を持つのです。

３節「さげすまれ、のけ者にされ、尊ばれない」痛みを抱える人が世には多くいます。「ツァラート(らい病)」患者を想起しますが(レビ 13 章)、ナアマンがエリシャの言葉に従って体を洗ったら、直ちにいやされました(Ⅱ列王 5 章)。 主イエスは近づき得ぬ光の中から、社会の隅で痛みを抱える人々に近づいて、悲しみを共有してくださる方。「上から下へ」へりくだられ、全き愛によってどんな人々の痛みと悲しみをも見捨てません。私たちはこの御姿に倣って、あらゆる人々を受け容れつつ、福音の希望を語ることができるのです。

12月6日

「痛みをになう人」

イザヤ 53:4-6

武安　宏樹　牧師

「痛み」について、聖書では肉体的なもの以上に精神的なものが頻出します。その深さゆえに人間的な医学でも心理学でも把握しきれないのが精神です。それは私たちが被造物に過ぎないためで、創造主は取扱説明書をお持ちです（Ｉコリント 2:11）。痛みは人が神から離れてしまったため起ります(創世記3章)。

4-6 節は苦難のしもべについての中心ですが、「しもべ」と「私たち」が対比されているのがポイントです。ひとりが堕落に端を発した全人類の罪と咎を背負っているのです。他の誰も助けてくれるどころか、傍観者的態度しか示すことのできない、霊的な事柄や神の愛を受けるに鈍い罪人の姿があります。私たちの耐え難い苦痛とは、自分の痛みを誰も理解してもらえない孤独です。神から離れている状態が、隣人への無関心と死を生むことを世は語ります。

世に生起する、愛の欠如．傷つけ合い．無関心．あざけり、それらの源である「私たちのそむきの罪」のために「彼」は刺し通され砕かれた。「そむきの罪」は、人がいったん結んだ契約を破る意です。契約とは神が選ばれた者に対しての、「とこしえの～愛の契約」(55:3)です。ここから迷い出た羊は傷を負いますが、「しもべ」は自分が犠牲になることを通し、代わりに羊を生かすに至りました。「懲らしめ」は矯正や回復の意。ゆがめられた神．人の関係を正すためでした。

「打ち傷」(1:5-6)を彼が代わりに負うことで、私たちはいやされました。神と正しい関係に置かれることで、初めて私たちは自分の罪や他人の痛みに気づきます。ひとりが全ての者のために十字架を負われた以上、神が私たちのいっさいの痛みを背負われたことを、そして精神の最も内奥の霊の部分に臨在されることを感謝しましょう。苦難のしもべであるイエス．キリストが私たちのために苦しまれた以上、傍観者でなく、聖霊による「聖なる痛み」と共に、荒廃した世と隣人の痛みのためとりなし、励ます者とされましょう。

12 月 13 日

「苦難の人」

イザヤ 53:7-9

武安　宏樹　牧師

同じ羊でも６節と７節とでは全く様子が異なります。「自分かって」（６節）な羊の欲望は果てしないものですが(伝道者 5:10)、行き着く先は破滅です。しかし７節の羊は、毛を刈られる時のように羊飼いを信頼しながら、従順に苦しみを受け容れました。そこには何か大きな任務を背負いつつ、自分を捧げようとする姿があります。「さまよえる羊」と「苦難の羊」の対照的な姿です。

「痛め～」とはモーセが召しを受けた時の言葉です(出エジプト 3:7-10)。彼がわがままなイスラエル人をエジプト軍から導き出すのは、両者の板挟みゆえ途方もない苦難であったと想像できます。その初めに神は過越の祭りを行うよう命じました。神がご自分の民になされた奴隷からの解放と約束の地へのの出発という偉大な業を思い起こしつつ、無傷の子羊がほふられる祭を通し、イザヤは苦難の羊の、新約ではイエス.キリストの型を見ることができます。モーセが海に手を伸ばした時に道は開かれました。神に召し出されて従順に従う者に、苦難の中で救いの道が開かれます。洗礼者ヨハネは主イエスが来られるのを見て言いました。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」（ヨハネ 1:29)

神は私たちを導くために、かけがえのないひとり子を犠牲として捧げてくださいました(ヨハネ 3:16)。私たちは開かれた特別な道を歩いています。行き先は御国です。しかしこの道に入れば何も苦しみがないというのは誤解です。苦難がやってきたら不満や逃避ではなく、御手の訓練だと喜んでください。口を開かずとも喜んで従うと、苦難のしもべがキリストの型となったように私たちもキリストを証しすることができます。救いの道が開かれていきます。

苦難の中で私たちは神の愛を知り、神を呼び求める特権が与えられていることを知ります(詩篇 119:71)。キリスト者の生活はきれい事ではありません。私たちは宗教的な言動で偽装せず、十字架の罪の赦しの確信に立って、弱さと共に苦しむ者と生きることができます。苦難の世界に踏み出しましょう。

12 月 20 日

「購い主イエス・キリスト」

ピリピ 2:6-11

武安　宏樹　牧師

ピリピ書はパウロが獄中から教会に向けて宛てた手紙です。主にある愛の交わりを促す内容ですが、「キリスト讃歌」と呼ばれる今日の箇所を通して、「汝らキリスト．イエスの心を心とせよ」(5 節文語訳)と主の生涯の素晴しさに目を留めることによって、教会のみならず私たち個人も大いに教えられます。

①　キリストのへりくだり（６～８節）
「神の御姿である方」とは、人間としてはヨセフとマリヤの子として地上に 生まれるよりも、永遠の昔から存在され、天地創造．統治の主と共に居られ、等しい栄光を持っていること(ヨハネ 1:2/コロサイ 1:15)。神の「かたち」とは、移り変わることない神の本質(能力．栄光．権威)のことです。最初のアダムは神のようになろうとして堕落しましたが、「第２のアダム」であるキリストは、神の子としての身分に固執せず、罪と無関係ながら奴隷のようになられました。「みこころを行うために」(ヘブル 10:7)十字架の死に至るまで従順を貫徹され、私たちに愛の模範を示されました。

②　高く上げられたキリスト（９～１１節）
「それゆえ」は重要な接続詞です。死に至るまでのへりくだりの結果として、キリストは神の右の座にまで上げられ、謙遜の勧めを自ら実践されました (ルカ 14:11)。全ての人間的．霊的権威よりも高く上げられました(イザヤ 52:13)。「与える」とは恵みを表す語から派生した動詞です。すべての権威がキリストをあがめ、地上の教会が死に至るまで戦い抜くために、上げられたのです(イザヤ 45:23-24)。私たちは自分の栄光を後にして「主イエス様」と告白する時、聖霊の働きにより神の右の座に居られるキリストを拝する恵みをいただいています。キリストこそ賛美に値する方(黙示 5:12)、いのちの光(ヨハネ 1:4)です。

12 月 27 日

「善にはさとく、悪にはうとく」

ローマ 16:17-20

武安　宏樹　牧師

親愛なるあいさつから一転して、短いながらも厳しい警告が語られます。教会の内情は分からなくとも、パウロがこれまで苦しめられてきた経験から、伝道や教会の一致を妨げる勢力に対して、免疫をつけてほしいと願います。

「学んだ教え」とは本書前半で展開された信仰義認の教理のことでしょう。神学的な錯誤や「俗悪なうわさ話」によって不敬虔が癌のように拡がり、信仰から外れた者も出たことをパウロは証言しています(Ⅰテモテ 6:20/Ⅱテモテ 1:16)。「そういう人たち」の本質を見抜き、よく気をつけて距離を置くよう勧めます。私たちも主の似姿に変えられる途上にあり、古い肉の性質が残っているので、弱さがありますが、彼らは自己中心に根差した肉の性質の奴隷となっており、「純朴な人」の信仰を美辞麗句で欺き、つまずかせる厄介な人です。

悪魔は今も神にねたみを燃やして、教会の一致を妨げることに懸命です。キリストの初臨により救いの道が完成したので、信じるだけで救われますが、悪魔は人々が救われないように、つまずくように、様々惑わそうとします。対処法は私たちが霊的な見分けをもつことです(Ⅰヨハネ 4:1-6)。悔い改めと聖霊の満たしが第一ですが、第二に惑わしと闘うことです(エペソ 6:10-20)。真理のためになすべき霊的闘いをしないのでは、不作為の罪を問われます。

「さとく」は「知恵」から派生した語です。日々のデボーションや聖書通読を通して神の知恵が蓄えられ、祈りを通して適用に導かれます。悪魔の攻撃がよくわかります。見分けに必要以上に悪霊に敏感になる必要はありません。祈りと御言葉により、真札と偽札の違いのように見分けることが可能です。惑わしはキリストの再臨に伴う「平和の神」の審判までの暫しの間のみです。「すみやかに」悪魔の息の根は止められます。勝利の主に信頼しましょう。